

紀要

37

- 草津市・北谷古墳群L地点出土埴輪について
 — 湖南地域出土埴輪資料の基礎的検討 — 辻川 哲朗 (1)
- 横穴式石室の構築原理を考える
 — 研究ノート：岩橋型石室を題材として — 堀 真人 (15)
- 福林寺12号墳の墳丘測量調査報告 宮村 誠二 (28)
- 近江出土の渡来銭貨 (2) 小島 孝修 (33)
- 近江における中世備前焼の基礎集成 山口 誠司 (49)
- 長浜市八雲書院資料調査報告〈瓦編3〉 福井 知樹 (57)
- 三次元データを歩く
 — 三次元データの利活用を目指して — 福井 知樹 (73)

横穴式石室の構築原理を考える

—研究ノート：岩橋型石室を題材として—

堀 真人

目次

1. はじめに
2. 横穴式石室の特徴と本論の目的
3. 横穴式石室の地域類型と岩橋型石室
4. 岩橋型石室の変遷と属性の確認
5. 岩橋型石室の変遷の解釈
6. おわりに

— 論文要旨 —

考古学においてモノの形の変化を考えると、機能的属性、意匠的属性、技術的属性の3つの属性を意識する。土器を例にするのであれば、機能的属性＝煮炊きする、貯蔵する、盛り付けるために必要とされる属性、意匠的属性＝文様や顔料の塗布など実用の面では必ずしも必要としない属性、技術的属性＝器壁を薄く仕上げるためのケズリ、粘土内の空気を抜くためのタタキなどのモノの成型に必要な属性といったように、具体的に属性をあげることができる。一方で土器のような遺物とは違い、遺構である横穴式石室を主題としたらどうか。埋葬施設という機能的属性、平面形における片袖式、両袖式といった袖形式や縦断面形における穹窿頂（ドーム状）天井、平天井といった意匠的属性、水はけをよくするための排水溝の設置や穹窿頂の天井を構築するために側壁を持ち送る、隅（角）を消すといった技術的属性が具体的な属性の例といえるだろう。そして、さらに機能的属性を示す埋葬施設としての機能を具体的に示すとすれば、「葬送儀礼」を実施する場といえる。

岩橋型石室は、和歌山県の北部、和歌山市に所在する岩橋千塚古墳群を中心に分布、変遷する横穴式石室の地域類型である。本稿では、地域類型の一つである岩橋型石室について、横穴式石室の形を決定する上記の3つの属性、機能的・意匠的・技術的属性のうち、機能的属性を重視して検討をおこなった。また、検討にあたっては、横穴式石室を構築する主体を発注者や施主として被葬者（集団）、施工者として石室工人の二つの立場を仮定して整理を試みた。

このように横穴式石室の形を構成する属性、特に機能的属性に注目するのであれば、岩橋型石室の埋葬施設としての機能的属性とは何を示すのであろうか。従来から指摘されているように岩橋型石室は、九州系横穴式石室で表現される「開かれた棺」としての機能がこれに相当すると考えた。その機能を演出する（成立させる）装置として玄室前道、板石による閉塞、石柵、屍床（石障）が採用され、変遷したと想定した。

そして、機能的属性を岩橋千塚古墳群内、周辺地域に分け、時期別にその変遷を整理した。機能的属性は、一方向的な変化を経ながら維持されていく様子がうかがえる。機能的属性によって維持されるべき葬送儀礼の観念（「開かれた棺」）が岩橋千塚古墳群内においては一貫して維持されていると評価できる一方で、周辺地域に岩橋型石室が採用されていく過程で、機能的属性と意匠的・技術的属性が一致しなくなっていく様子が明らかになった。

このような状況が生じる理由は、横穴式石室の築造を希望する施主＝被葬者（集団）と、実際に造る施工者＝石室工人の意図の不一致をあげたい。つまり、岩橋千塚古墳群においては、被葬者（集団）の意図する葬送儀礼を的確に石室工人がくみ取って形にしているといえ、それは施主と施工者一体化、岩橋千塚古墳群のお抱え石室工人であったと考えた。一方、周辺地域で石室を構築する場合は、被葬者が石室工人を岩橋千塚古墳群の被葬者（集団）から借り受け、石室を構築するが、そこに表現されている意匠的・技術的属性が、機能的属性に基づくものであることを被葬者（集団）が共有しなかった結果と考えた。

キーワード

横穴式石室 岩橋型石室 機能的属性 葬送儀礼 被葬者と石室工人

1. はじめに

横穴式石室の研究のアプローチには、様々な観点が存在する。横穴式石室は、古墳時代後期に造られた墓に設置された埋葬施設の一つであり、そこに反映される技術的な特色・共通性は、地域の特性や地域と地域の関係性が反映されている。そしてその特性や関係性は、被葬者のそれと同一で理解されることが多い。つまり、石室の構造の共通性は、被葬者同士の関係性の濃淡を示し、一定の地域でそれが確認されれば、地域的なつながりが表象されていると解釈される。

確かに、被葬者もしくは被葬者が所属する集団が、主体的に技術的な特色を選択することもあるだろう。しかし、一方で、横穴式石室を構築するためには、日用品（土器など）を作るような技術ではなく、施工監理をはじめとした特殊な技術が必要であることは想像に難くない。そのようであるならば、横穴式石室を構築する背景は、造墓（横穴式石室の構築）を決定する施主（被葬者）と実際に造墓する施工者（石室工人）の関与を分ける必要があるのではないかと考える。その役割分担は、施主（被葬者）はどのような石室に自らが埋葬されたいのか＝葬送儀礼・観念を決定する、そして被葬者の注文に応えるのが施工者（石室工人）である。施工者は、施主の考える葬送儀礼・観念を横穴式石室における装置として実現・具体化が求められる。そのための試行錯誤があり、最終的に施主の注文を達成できるのではないだろうか。

2. 横穴式石室の特徴と本論の目的

横穴式石室は、遺構として認識される立体的な構造物である。そして、それを構成する様々な属性から特徴が説明される。具体的には、縦断面や横断面の形態、奥壁・玄室側壁・前壁・羨道側壁・玄門部・羨門部における石材使用法、大きさ、使用されている石材の加工法、岩石的な石材種などである。これは、遺物である土器の地域性や編年を考える際の属性分析と変わりがない。

土器と同様に横穴式石室は機能、意匠、制作技術の3つの属性が石室の形の決定に大きく作用すると太田宏明氏は整理した（太田 2016）。中でもモノの伝播、社会組織の復元や集団間の交流の在り方を考えていくうえでは、前述の3つの属性のうち、機能的属性が意匠・技術的属性と深く結びついていることから、意匠・技術によって決定される属性が重要であるとした。ここでいう「意匠」とは「何らかの社会的現象を象徴する機能を持つ部位」とであると定義づけ（太田 2016 p 29）、具体的には、平面形態や縦断面形態などで表現される「プラン」とも呼ばれる横穴式石室のデザインをあげている。

モノの形を決定する要因として機能、意匠、技術的属性が大きく関与していることについて異論はない。しかし、本稿においては、機能的属性から「社会組織の復元や集団

間の交流の在り方」を考えることを目的としたい。それは横穴式石室の「機能」の本質が、「遺骸を埋葬する施設であること」にあるからだ。遺骸を埋葬する（葬送儀礼を執行する場所）役割そのものが横穴式石室であるからこそ、機能的属性が意匠的属性や技術的属性を規定すると考える。機能的属性が最上位に位置付けられ、それに従って意匠的属性、技術的属性が決定される関係となる。

3. 横穴式石室の地域類型と岩橋型石室

(1) 横穴式石室の地域類型

横穴式石室の地域類型とは、横穴式石室の特徴的な属性を抽出し、広域・狭域を問わず一定の地域に分布を限定することができる型式を指す。

代表的な例として「畿内系石室」と「九州系石室」があげられる。共に広範囲の影響を持った横穴式石室の類型である(1)。「畿内系石室」に共通する属性は研究者によっても相違があるものの、最大公約数的な特徴としては以下のとおりである（土生田 1994、森下 1996、山崎 2003）。

- i) 玄室平面形が矩形である。
- ii) 縦断面の属性として前壁を有し、平天井である。
- iii) 玄門部の石材が内側にせり出さない。
- iv) 閉塞を塊石でおこなう。

一方、「九州系石室」の特徴は以下のとおりである（柳沢 1975、森下 1996、藏富士 2009）。

- i) 玄室基底石への腰石の採用。
- ii) 玄門立柱石、仕切り石の採用（内側にせり出す）。
- iii) 閉塞を板石でおこなう。

そして、「畿内系石室」と「九州系石室」における上記の意匠的・技術的差異が現れる理由として、横穴式石室の機能的属性、埋葬観念の違いがある。いわゆる「開かれた棺」と「閉ざされた棺」である（和田 2014）。「開かれた棺」とは玄室に石棺や木棺を設置せずに、遺骸を解放した状態で埋葬する石室を指す。玄室そのものが棺の役割を担っている。一方、「閉ざされた棺」は石室に石棺や木棺を設置し、その中に遺骸を入れて埋葬することから、玄室は棺を収める部屋となる。「開かれた棺」は九州系横穴式石室、対して「閉ざされた棺」は石棺や釘留式の木棺等を使用する畿内系横穴式石室の特徴となる。

(2) 地域類型としての岩橋型石室

前節で整理した代表的な地域類型である「畿内系横穴式石室」「九州系横穴式石室」に対して、岩橋型石室は和歌山県の北部地域に分布する、地域的なまとまりを示す地域類型である（図1）。分布の中心は、岩橋千塚古墳群である。属性に関わる主な特徴は、次のように整理される（森 1967、和歌山県立紀伊風土記の丘資料館 1996、黒石 2007、和歌山県立紀伊風土記の丘 2019）。

- ①板状の結晶片岩を使用する。

(和歌山県立紀伊風土記の丘2019に加筆)

- ②平天井で高いものが多い。
- ③玄門部が内部に突出する。
- ④玄室前道を有し、基石を据える。
- ⑤玄門部を板状の扉石で閉塞する。
- ⑥排水溝を備える。
- ⑦石柵・石梁を備えるものがある。
- ⑧仕切石などの屍床を有する。
- ⑨遺骸を石室主軸に直交に配置する。
- ⑩玄室平面形態が長方形・方形・T字形の石室が存在する。
- ⑪石棺を納置しない。

上記の特徴は、岩橋型石室が隣接する地域の主流である「畿内系横穴式石室」の特徴よりも、「九州系横穴式石室」の特徴を多く備えていることを示している。前述の通り「九州系横穴式石室」特徴は、埋葬施設を構築する時の「開かれた棺」という観念である。地理的に近接しているわけではない九州系横穴式石室の特徴を岩橋型石室が多く備えていることは、人を介した埋葬観念にかかわる共通性を共有していたと評価できる。

「開かれた棺」という埋葬観念を共有する九州系横穴式石室と岩橋型石室を、A：石室形態に関する特徴、B：構築技術に関する特徴、C：埋葬行為に関する特徴の3つの特徴に整理し、比較検討を藏富士寛氏がおこなっている（藏富士 2019）。それを参考にしながら、上記の①～⑪の岩橋型石室の特徴を当てはめると以下ようになる。

- A. 石室形態に関する特徴 ②
- B. 構築技術に関する特徴 ①③④⑥⑦
- C. 埋葬行為に関する特徴 ⑤⑧⑨⑩⑪

九州系横穴式石室との比較を行った藏富士氏は②③⑦⑧⑨⑪は九州系横穴式石室と共通しているが、①④⑩は異なっているとしている。

また、筆者は⑦の石柵・石梁を備えるという特徴、特に石柵は、構築技術に関する特徴というよりも⑤の玄門部を板石で閉塞する行為と同様に埋葬観念に関わる施設と評価する立場である（2）。また、⑩は石室の主軸に直交する埋葬方式×埋葬数によって変化するとの見解があることから（黒石 2007）、埋葬行為に関する特徴が石室の平面形に影響を与えたとする考えに同意したい。

これを前章で取り上げた横穴式石室の属性に照らし合わせるのであれば、A＝意匠的属性、B＝技術的属性、C＝機能的属性といえる。その上で、機能的属性が意匠的属性や技術的属性に影響を与えると考えるならば次のとおりになる。

- 機能的属性 ②③⑤⑦⑧⑨⑩⑪
- 意匠的属性／技術的属性 ①④⑥

そして、各属性の決定主体者は、機能的属性＝被葬者（被葬者集団）、意匠的属性／技術的属性＝石室工人（工人集団）と仮定しておきたい。

4. 岩橋型石室の変遷と属性の確認

岩橋型石室については、すでに羨道の方向、長さ、玄室前道の接続位置・基石、袖部・奥壁の石積みなどから詳細な編年が整備されている（中司 2003、萩野谷 2019 a・2021・2022）。それらの編年を参考に、各属性がどのように成立し、変遷しているかを概観していく。

概観するにあたり時期をⅠ期からⅣ期に区分した。Ⅰ期はTK47～MT15型式段階、Ⅱ期はMT15～TK10型式段階、Ⅲ期はTK43型式段階、Ⅳ期はTK209型式段階とする（田辺 1966・1981）。また、岩橋型石室の分布の中心地である岩橋千塚古墳群とそれ以外の地域、岩橋千塚古墳群においては、首長系譜と考えられる大型古墳とそれ以外の中小型古墳に分けてみていくこととする（3）。その上で発掘調査が実施されている古墳を中心に状況を確認する。

(1) Ⅰ期

Ⅰ期はブレ岩橋型石室段階と呼べる段階である。岩橋型石室を特徴付ける諸属性が揃っておらず、様々な属性が並列している状況である。

①岩橋千塚古墳群

岩橋千塚古墳群は、和歌山県の北部の紀ノ川河口部の和歌山市に位置する。和歌山市の東部、紀ノ川左岸の岩橋丘陵に4世紀末から7世紀にかけて約850基が、築造されている。

i) 大型古墳

・大谷山6号墳（和歌山県教育委員会 2017、以下、教育委員会は教委と略す）

墳長28mの二段築成の前方後円墳で、埋葬施設として後円部に横穴式石室、後円部裾に箱式石棺、前方部に竪穴式石室が設置されている。円筒埴輪列、動物埴輪など形象埴輪が検出されている。

横穴式石室は割石積みの右片袖式（4）で、羨道が玄室の主軸に対して斜行して延びている。玄室前道は未発達である。玄室の壁面に赤色顔料が塗布されており、側壁の3か所で突起石が確認されている。羨門部を板石積みで閉塞している。

・大谷山28号墳（和歌山県教委 2018）

墳長27mの前方後円墳で、埋葬施設は後円部に横穴式石室、後円部南西側に箱式石棺が設置されている。横穴式石室は両袖式で平面形は正方形に近く、玄室前道を備え、玄門部は一枚の板石で閉塞されている。袖部は複数列による平積みで、玄門幅よりやや広い基石が設置されている。玄室の奥壁・側壁に板石が立てかけられていることから、屍床として機能していたと考えられる。2体以上の遺骸が主軸直交に置かれていたと推定される。

・花山6号墳（末永編 1967）

墳長49mの前方後円墳で、墳丘基部に円筒埴輪が圍繞し、南側の造出から家形埴輪等の形象埴輪がみつまっている。埋葬施設として後円部に横穴式石室が設置されてい

る。横穴式石室は右片袖傾向の強い両袖式で、羨道が玄室の主軸に斜行して延びている。玄室前道を備え、基石は玄門幅とほぼ等しい。玄室壁面に赤色顔料が塗布されていた。

・花山 33 号墳（和歌山県教委 2000）

墳長 32 m の前方後円墳で、埋葬施設として後円部に横穴式石室が設置されている。横穴式石室は右片袖傾向の強い両袖式で、袖部は、複数列の平積みである。玄室前道を備え、基石は玄門幅とほぼ等しい。玄室壁面に赤色顔料が塗布されている。玄門部は板石による閉塞で、羨門部を板石積みで閉塞している。玄門部の扉石の下から原位置を保った須恵器群が見つかった。

②周辺地域

岩橋千塚古墳群以外では確認されていない。

(2) II 期

この段階は岩橋型石室の確立段階に位置付けられる。そして、岩橋千塚古墳群の周辺地域で岩橋型石室が造られはじめる。

①岩橋千塚古墳群

i) 大型墳

・大谷山 22 号墳（末永編 1967）

墳長 68 m、盾形の基壇を含めると 80 m の前方後円墳である。墳丘の裾部に円筒埴輪が圍繞し、南側のくびれ部の造出しで形象埴輪が検出されている。

埋葬施設は後円部に横穴式石室が設置されている。両袖式であるが羨道は、やや左寄りに接続している。玄室前道を備え、基石は袖基底部に及んでいる。奥壁と側壁に組み込まれた 2 枚の石棚、水平方向の石梁 1 本を備える。板石積み閉塞で、閉塞石付近から須恵器群が出土している。

岩橋型石室における石棚の初源に位置づけられる。

・大日山 35 号墳（和歌山県教委 2015）

墳長 86 m、盾形の基壇を含めると 105 m の二段築盛の前方後円墳である。平坦面には円筒埴輪が圍繞し、東西の造出から多様な形象埴輪が出土している。埋葬施設は後円部に横穴式石室が設置されている。

横穴式石室は、2 枚の石棚、水平方向の石梁 1 本を備える。大谷 22 号墳と同様に両袖式であるがやや左側に寄って羨道が接続されている。袖部は 1 列の平積みで、玄室前道を備え、玄門以上の幅の基石を設置している。

ii) 中小型古墳

・大日山 70 号墳（和歌山県教委 2000）

直径 14 m の円墳で、埋葬施設として左片袖の横穴式石室が設置されている。玄室床面には敷石が認められる。袖部は 1 列の平積みである。玄門と同じ幅の基石を設置して、玄室前道を形成している。羨門部を板石閉塞している。床面の遺存状況が良好で、遺物の配置から左側壁側に主軸並行の単葬であったと判断される。

②周辺地域

i) 明楽 2 号墳（和歌山県立紀伊風土記の丘 2020）

紀ノ川南岸の岩橋丘陵から高積山を隔てた東側の鳩羽山に位置する。直径 16 m の円墳で、埋葬施設として横穴式石室と縦穴式石室が設置されている。玄室の長さ 1.3 m、幅 1.8 m で、平面形が T 字型を呈する。

ii) 晒山 10 号墳（大野他 1978）

紀ノ川北岸の背見山丘陵に位置する。墳長 35 m の前方後円墳で、東西の造出から円筒埴輪列と形象埴輪が検出されている。後円部に割石積みの横穴式石室が設置されている。玄室前道・基石を備えている。

iii) 箕島 1 号墳（一本松古墳：有田市教委 1979）

有田川北岸の河口部に位置する。直径 12 m の円墳で、裾部に円筒埴輪が巡っていたと推定される。横穴式石室は割石積みの両袖式で、羨道が中央よりやや右寄りに取りついている。玄室前道・基石を備えており、袖部は基本 1 列で、部分的に複数列の平積みである。

(3) III 期

この段階は、岩橋型石室の石室属性が出そろい完成段階と位置付けられる。属性が出そろった点では完成段階といえるが、設置される石室の規模、採用される地域の範囲を考えると最盛期とも評価できる。岩橋千塚古墳群内の中小規模の石室においても石棚・石梁が採用されるようになる。また、前段階まであまり認められなかった岩橋型石室が周辺地域に拡散している状況がうかがえる。

①岩橋千塚古墳群

i) 大型墳

・天王塚古墳（和歌山県教委 2020）

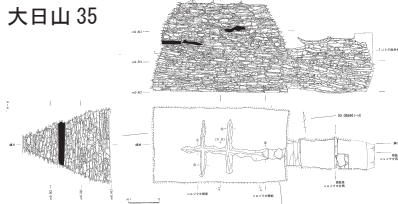
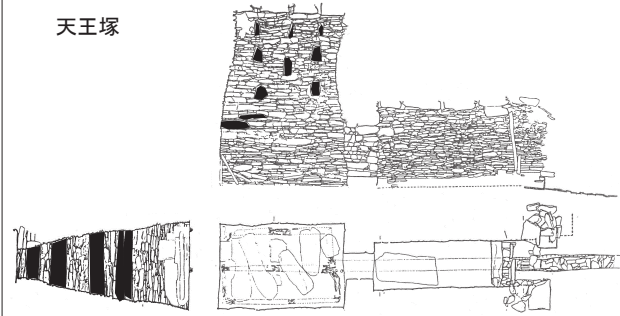
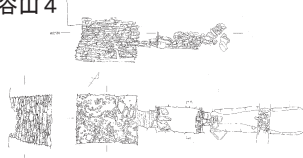
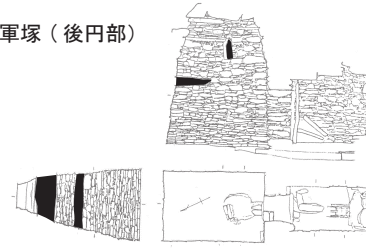
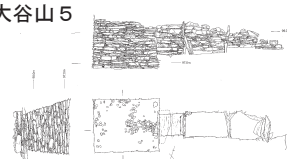
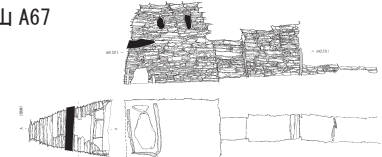
墳長 88 m の前方後円墳で、墳丘には埴輪を樹立しない。後円部に横穴式石室が設置されており、2 枚の石棚と 8 本の石梁が架構されている。玄室前道・基石を備え、岩橋千塚古墳群内で最も玄室の天井が高い。玄門部と羨門部の二か所で板石による閉塞が認められる。また、玄室内には断面 U 字状の刳り込み加工がされた板石が 8 枚確認されており、遺骸を置く石障的な使用が想定されている。羨道部から土師器の壺が出土している。

・将軍塚（前山 B 53 号墳：末永雅雄編 1967）

墳長 42 m の前方後円墳で、後円部と前方部にそれぞれ横穴式石室を設置している。

後円部の石室は、両袖式の石室で岩橋千塚古墳群内では天王塚古墳に次ぐ高さの玄室天井高である。石棚 1 枚、垂直方向の石梁 1 本を架構している。玄室前道、袖基底石となっている基石を備えている。袖部は 1 列の平積みである。玄門部、羨門部で板石による閉塞が確認できる。玄門部に化粧石が立てられる。

前方部の石室は、両袖式の石室で石棚 1 枚を架構し、玄室前道、玄室前壁基底石となっている基石を備える。袖部

時期	主要古墳	
	岩橋千塚古墳群	
I	大谷山 6 	
II	大谷山 22 	前山 A58 
	大日山 35 	大日山 70 
III	天王塚 	大谷山 4 
	将軍塚（後円部） 	大谷山 5 
	前山 A67 	
IV	井辺 1 	寺内35 

※石室 S=1:250

図3 岩橋型石室の変遷 1

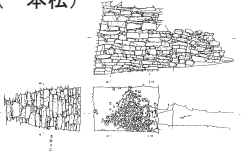
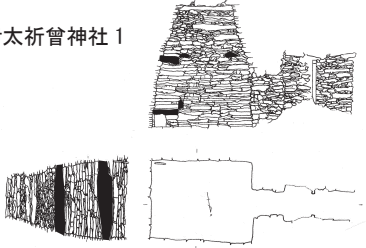
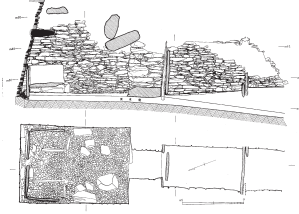
時期	紀ノ川～有田川	石棚	石梁	羨道	袖	閉塞装置	玄室前道	前道基石	袖石
I				斜交	右 両	板石積		玄門幅	複列平積
II	④ 簗島（一本松） 	2枚 1枚	垂直	平行		板石		前壁入	1列平積
III	⑤ 伊太祈曾神社 1  ⑫ 室山 1  ⑥ 鳴滝 1 	1枚 2段	水平					前壁 基底	
IV									

図3 岩橋型石室の変遷2

※石室 S=1:250 番号は分布図に対応

は1列の平積みである。

ii) 中小型古墳

・前山A 13号墳（和歌山県教委 2015）

直径18mの円墳で、埋葬施設として横穴式石室を設置する。1枚の石棚と垂直方向の石梁2本が架構される。玄室前道・袖基底石となっている基石を備え、玄門部に化粧石が立てられる。

②周辺地域

i) 伊太祈曾神社1号墳（和歌山大学考古学研究会 1974）

岩橋丘陵の南東側、伊太祈曾盆地の南端の丘陵部に位置する。直径16mの円墳で、埋葬施設として横穴式石室を設置する。石室内に、上下2段の石棚と水平方向の石梁を架構する。下段の石棚は前面に梁状の板石を架構していることから屍床台として機能したと推定される。玄室前道・基石を備え、羨門部に化粧石が立てられる。

ii) 鳴滝1号墳（京都大学文学部考古学研究室 1967）

紀ノ川北岸の和泉山脈の南麓に位置し、円墳と推定されている。石室内には、1枚の石棚とその下部に板石による屍床を備える。屍床の前面で鍔金具が出土していることから、木棺を使用していたとわかる。玄室前道・基石を備え、玄門部で板石閉塞を行っている。

iii) 船戸山古墳群（吉田・松田 1979/ 岩出町 1976）

紀ノ川南岸、紀ノ川と貴志川の合流地点付近にある丘陵に位置する。7基の円墳から成る古墳群である。

・2号墳

直径14mの円墳で、埋葬施設は横穴式石室を設置している。石棚2枚が上下2段に架構され、石障が確認されている。

・3号墳2号石室

直径20mの円墳で、埋葬施設は2基の横穴式室と竪穴式石室を設置している。このうち2号石室は石棚1枚が架構され、その下部には石障が設けられていた。副葬品として石棚上に須恵器の杯身4個が置かれていた。また、ミニチュア炊飯具セットや銀・銅製の釧が出土している。

・6号墳

直径13～16mの円墳で、埋葬施設として箱式石棺と横穴式石室を設置している。構造的に玄室前道を備えるなど岩橋型石室の影響を強く受けている石室であるが、蛇紋岩や砂岩を一部使用している点で典型的な岩橋型石室と異なる。副葬品としてミニチュア炊飯具、棺金具、銅釧などが出土している。

iv) 八幡塚古墳（打出町 1981）

紀ノ川北岸に位置する。直径20mの円墳で、埋葬施設として箱式石棺と横穴式石室を設置している。奥壁に石棚1枚を架構し、その下部に主軸直交の仕切り石1枚と玄室の中央付近にも板石の痕跡が残る。玄室前道を備え、基石は部分的に袖基底部に入り込んでいたものと思われる。玄

門部で板石による閉塞をしていた。

v) 高尾山1号墳（和歌山大学学生自治会考古学研究会 1958/ 貴志川町 1981）

貴志川の東岸の高尾山丘陵に位置する。10基から成る古墳群の1基である。直径13～14mの円墳で、埋葬施設として竪穴式石室と横穴式石室を設置している。横穴式石室は両袖式で、奥壁に石棚1枚を架構する。玄室前道を備え、基石は袖基底石を成している。玄門部を板石閉塞している。石棚の上部に鉄鍬が置かれていたとの伝聞がある。

vi) 北1号墳（貴志川町 1981）

貴志川の東岸に位置する、5基から成る古墳群の1基である。直径20mの円墳で、埋葬施設は横穴式石室を設置している。石室は両袖式で、奥壁に石棚を架構している。玄室前道を備え、基石は袖基底石を成している。羨門部で板石閉塞を行っている。

vii) 室山古墳群（海南市 1979）

和歌山市と海南市の市境の亀川左岸にある丘陵上に位置する7基からなる古墳群である。

・1号墳

20×17mの楕円形の墳丘で、埋葬施設として横穴式石室を設置している。石室は両袖式で、石棚が1枚、4本の垂直方向の石梁を架構する。玄室前道を備え、基石は袖基底部に入り込んでいる。袖部は1列の平積みである。玄室前道前面に板石による扉石を備えている。石棚上から鉄鍬が出土している。

・2号墳

直径15mの円墳で、埋葬施設として横穴式石室を設置している。石室は両袖式で、玄室前道を備え、基石は袖基底部に入り込んでいる。袖部は1列平積みで、奥壁に石棚1枚、水平の石梁1本を架構している。

viii) 山崎山1号墳（和歌山県教委 1978）

和歌山市と海南市の市境の亀川の川左岸にある丘陵部に位置する16基からなる古墳群の1基である。直径20mの円墳で、埋葬施設として横穴式石室と竪穴系小石室を設置している。横穴式石室は両袖式で、石棚1枚を奥壁に架構する。玄室床面には仕切り石が主軸に直交して設置され、その内側からガラス玉、須恵器等の副葬品が出土している。玄室前道を備え、基石は袖基底部を成している。袖部は1列の平積みである。玄室前道前面で板石閉塞したうえで、羨門部を板石積み、粘土を充填して閉塞している。

(4) IV期

この段階は、岩橋型石室の終焉段階に位置付けられる。周辺地域では、ほぼ造られなくなる。岩橋千塚古墳群内でも古墳築造が低調となる。

①岩橋千塚古墳群

i) 大型墳

・井辺1号墳（末永雅雄編 1967）

40 m × 28 m の方墳で、埋葬施設として、横穴式石室を設置する。石室は両袖式で、奥壁に石棚 1 枚、垂直方向の石梁 1 本を架構している。石棚下に屍床、玄室前道を備え、袖基底石を成している。袖部は 1 列の平積みである。右側壁玄門寄り須恵器、玄門部羨道側で土師器の小型甕が出土している。

ii) 中小型古墳

・寺内 35 号墳（和歌山県教委 1968）

直径 12 m の円墳で、埋葬施設として横穴式石室と箱式石棺を設置している。羨道部の損壊が激しいため、玄室前道、前壁の状態など不明な部分が多い。

②周辺地域

岩橋千塚古墳群以外では確認されていない。

(5) 小結

ここで改めて岩橋型石室について各時期の状況をまとめておきたい。

①各段階の概要

I 期 岩橋型石室のプレ段階に位置付けられ、各要素に複数系統の特色がみられる。岩橋型石室の諸要素が揃っていない段階である。具体的には玄室前道が未完成で、基石を備えながらも、玄門部幅と等しいことが多く、羨道が玄室主軸に対して斜行して延びる石室が多いことがあげられる。また、板石閉塞や玄室壁面に赤色顔料を塗布したり、突起石を備えるなど、九州系横穴式石室の機能的／意匠的属性がみられる。一方で、石積みで閉塞することや両袖式の石室でありながら右片袖傾向が強いなど畿内系石室の意匠的要素もみられる。岩橋千塚古墳群以外では分布が認められないことから、岩橋千塚古墳群内で岩橋型石室を模索している段階である。

II 期 岩橋型石室の確立段階に位置付けられる。玄室前道の基本が完成し、基石が袖基底石に組み込まれる例が多くなる。大型石室において石棚・石梁が登場し、玄門・羨道部で板石による閉塞を行う。この段階においても両袖式を採りながらも、袖の幅が左右の非対称ことが多い。分布においては、岩橋千塚古墳群以外の紀ノ川流域で岩橋型石室が造られ始める。この点からも岩橋千塚古墳群内で基本的な属性が確立し、外部へ岩橋型石室を供給始めた最初の段階といえる。

III 期 岩橋型石室の完成段階（最盛期）に位置付けられる。玄室前道の基石は基本、袖基底石に組み込まれる。岩橋千塚古墳群内の中小規模の石室においても石棚・石梁が採用され、玄門部、羨門部に化粧石が立てられる例が多くなる。岩橋千塚古墳群内の天王塚古墳において最も天井が高くなるなど、確立した岩橋型石室がその要素を発達させる。分布が最も広域なる段階である。

IV 期 岩橋型石室の終焉段階に位置付けられる。岩橋千塚

古墳群内においても造墓活動が低調となる。岩橋千塚古墳群以外においては、分布が認められなくなる。

②各要素の変遷

袖部 基本平積みで、複数列平積みから 1 列平積みへの変遷が認められる。

玄室前道・基石 II 期で玄室前道が定着し、基石も袖部に組み込まれ始める。III 期になると基石が袖基底石となる。

石棚・石梁 II 期に岩橋千塚古墳群内の大型古墳石室で採用される。III 期に岩橋千塚古墳群内の中小型古墳で採用されると同時に岩橋千塚古墳群以外の地域にも波及していく。

③分布の変遷

岩橋千塚古墳群内では I 期から IV 期まで一貫して岩橋型石室が採用されている。周辺地域においては、II 期に紀ノ川流域で採用され、III 期には紀北西部と紀中南部に拡散する (5)。IV 期になると低調となり、基本は岩橋千塚古墳群内に留まっている。

5. 岩橋型石室の変遷の解釈

本章では、岩橋型石室の変遷・展開を施主：被葬者（集団）と施工者：石室工人、岩橋千塚古墳群と周辺地域の 2 つの視点から整理し、その意味を評価したい。

(1) 施主：被葬者（集団）の視点

I 期 岩橋型石室の諸要素が確立していない。九州系横穴式石室と畿内系横穴式石室の 2 系統の意匠的・技術的属性が入り混じっていることから明らかである。このことから、施主が求める葬送儀礼を施行するための設備が整っていない段階と考えられる。つまり、「開かれた棺」を体現した石室の未完成段階と評価できる。

II 期 岩橋型石室を特徴付ける諸要素が出そろった。確立段階である。この段階に九州系横穴式石室「開かれた棺」を基礎とした岩橋型石室の葬送儀礼が確立したと考える。この確立を契機として、岩橋千塚古墳群以外の紀ノ川流域に岩橋型石室が展開し始める。ただし、大日山 70 号墳のように施設としては岩橋型石室を備えながら、石室内で行われる葬送儀礼が異なる例が確認されることから、この段階では、墓域を共有する集団内に出自が異なる場合が存在することを示唆している。

III 期 岩橋型石室が、岩橋千塚古墳群外に急速に展開するようになる。この拡散において、一部の石室で石室を構成する要素のうち石棚の架構形態、使用方法がアレンジされている様子が確認できる。具体的には伊太祈曽神社 1 号墳や船戸山 2 号墳、同 3 号墳 2 号石室、室山 1 号墳である。石棚は、九州系横穴式石室の葬送儀礼において「開かれた棺」を構成する必要な要素であることから、棺台や副葬品の置き場所としての機能もたせる設備への石棚のアレンジ

は、石室の構造と葬送儀礼が一致しない現象と理解できる。これは、船戸山3号墳第2号石室や6号墳でミニチュア炊飯具が出土している例、鳴滝1号墳で鏝座金具が出土していることから木棺を採用している例なども同じ現象といえる。岩橋千塚古墳群外における岩橋型石室の採用が、葬送儀礼と不一致であることが顕著となっている。

Ⅳ期 岩橋型石室の築造が低調になる中、岩橋千塚古墳群においては継続的に造られる。また、Ⅱ期に確立した岩橋型石室の属性が堅持されていることから葬送儀礼と石室構造が一貫していることがうかがえる。

(2) 施工者：石室工人からの視点

Ⅰ期 石室の構造における諸要素が入り組んでいることから、石室を構築するための複数の技術（九州系横穴式石室・畿内系横穴式石室）が存在していたと考えられる。これは施主が求める葬送儀礼に対して、石室の機能的属性の試行錯誤がなされた結果と考えておきたい。

Ⅱ期 岩橋千塚古墳群内の大型石室で岩橋型石室を特徴付ける属性が揃うことから、施工者において意匠的・技術的属性が統合・統一され、九州系横穴式石室をベースとした岩橋型石室構築技術が完成した段階である。結果、石室型式の統一が図られたとみる。岩橋型石室の確立は岩橋千塚古墳群内で達成されたと考えられる。つまり、施工者である石室工人集団は、岩橋千塚古墳群の被葬者（集団）専属であった可能性が高く、岩橋型石室の確立を契機として、岩橋千塚古墳群以外の紀ノ川流域に石室工人集団が派遣され、石室を築造したと想定したい。

Ⅲ期 岩橋千塚古墳群内の石室を構成する諸要素の変化する方向性が共通していることから、施工者は同一である可能性が高い。そして前段階まで大型古墳に限定されていた石柵・石梁の導入が、岩橋千塚古墳群内の中小型古墳にまで広がる。岩橋千塚古墳群内では、岩橋型石室の構築技術が完成の域に達し、岩橋型石室内で最も天井高が高く、最大容積を誇る天王塚古墳が築かれる。

そして岩橋千塚古墳群の周辺地域の石室構築においても岩橋千塚古墳群内と同様に岩橋型石室を特徴付ける諸要素を備えていることから、岩橋型石室の構築のために施工者：石室工人が派遣されたと考えられる。ただし、施設としての石室は被葬者（集団）同士の関係において構築されるものの、岩橋型石室の本質となる葬送儀礼の一端を担う機能的要素「石柵」がアレンジされている例が認められる。これは、技術的属性というよりは、機能的属性の欠落として評価される。つまり、埋葬施設として岩橋型石室が受け入れられたものの、「開かれた棺」を志向する葬送儀礼は不完全な形で受け入れられた、もしくは受け入れられなかったと考えられる。

Ⅳ期 前段階まで見られた周辺地域への拡大は終了し、岩橋型石室の構築が低調となる。しかし、その中でも岩橋千

塚古墳群内では、機能的属性と意匠・技術的属性の一致が保たれた状況が確認できる。

(3) 石室の構造と葬送儀礼

岩橋型石室を特徴づける属性の変化の方向が一方向であることから、石室の構築を担った工人は、単一の集団であった可能性が高い。そしてその工人の本拠地ともいべき地域は、岩橋千塚古墳群であろう。すでに指摘されていることであるが、岩橋千塚古墳群で確立した属性が時期差をもって群内、さらには周辺地域に波及していく状況からも追認できる（萩野谷 2021）。そして岩橋千塚古墳群では、一貫して岩橋型石室を造り続けている。また、ここで重要なことは、岩橋千塚古墳群内において葬送儀礼と石室構造が一貫して一致しつづけていることである。岩橋型石室を構築した周辺地域においては、施設として岩橋型石室を採用するが、その中で行われたと想定される葬送儀礼は不一致であった可能性が高いことは対照的である。

6. おわりに

本稿では、石室の形を決める属性、機能的・意匠的・技術的属性の中で、特に機能的属性＝葬送儀礼の場と位置付けて、横穴式石室の形を決定する属性の検討を行った。その結果、

- ①岩橋千塚古墳群では、岩橋型石室は石室構造と葬送儀礼が一貫して一致し続ける。
- ②岩橋千塚古墳群以外の周辺地域においては、岩橋型石室は石室構造のみの共有で、葬送儀礼は不一致である例がみられる。

ことがわかった。岩橋千塚古墳群においては被葬者（集団）と石室工人の間においては、機能的・意匠的・技術的属性が一致する一体性が持続していたと考えられる。一方で、岩橋千塚古墳群外の周辺地域の岩橋型石室は、被葬者（集団）と石室工人の間において機能的・意匠的・技術的属性の一致が十分に図られていないことから、機能的属性と意匠・技術的属性が分離していたと評価できる。

このことは、岩橋千塚古墳群内で岩橋型石室を完成させた被葬者（集団）と石室工人が、機能的属性＝九州系横穴式石室の葬送儀礼の根幹をなす「開かれた棺」を維持しながら意匠的・技術的属性との一貫性を保持していたことが、周辺地域との差異を明らかにすることにより強調できたと考える。その点から周辺地域における岩橋型石室は、機能的属性と意匠・技術的属性が一致しない「準岩橋型石室」と呼ぶべき石室である（図5）。

岩橋型石室、特に岩橋千塚古墳群は、他地域と比較してもいわゆる九州系横穴式石室の機能的属性「開かれた棺」を保持し続け、継続させた稀有な類型／地域例といえる。裏を返せば、だからこそ横穴式石室の地域類型として「岩橋型石室」が成立し、維持され、近接する地域の畿内系の

岩橋型石室

『開かれた棺』

岩橋千塚古墳群

◆被葬者（集団）

【埋葬観念】＝開かれた棺

- 平天井で高い
- 木棺/石棺を納置しない
- 遺骸を石室主軸に直交配置する
 - ・玄室の平面形態が長方形・方形・T字型の石室が存在する

◆石室工人

【構造/施設】

- 玄門部を板状の扉石で閉塞する
 - ・玄門部が内側に突出する
 - ・玄室前道を有し基石を据える
- 石棚・石梁を備えるものがある
- 平天井で高い
- 仕切り石で屍床を有する
- 遺体の数により玄室の平面形態が長方形・方形・T字型の石室につくる

- 板状の結晶片岩を使用する
- 排水溝を備える

準岩橋型石室

岩橋千塚古墳群周辺地域

◆被葬者（集団）

【埋葬観念】

- 岩橋千塚古墳群と異なる
 - ・石棚の棚として利用
 - 上下2段の石棚の架構
 - ・木棺/石棺の採用
 - ・ミニチュア炊飯具の副葬

◆石室工人

【構造/施設】

- 玄門部を板状の扉石で閉塞する
 - ・玄門部が内側に突出する
 - ・玄室前道を有し基石を据える
- 石棚・石梁を備えるものがある
- 平天井で高い
- 仕切り石で屍床を有する
- 板状の結晶片岩を使用する
- 排水溝を備える

図5 岩橋型石室と準岩橋型石室

古墳名	墳形	規模	玄室長	玄室幅	玄室高	袖	玄室前道	石棚	石梁	化粧石
大谷山6号墳	前方後円	28	3.8	2.4	—	右	—	—	—	—
大谷山28号墳	前方後円	27	3	2.1	—	両	○	—	—	—
花山6号墳	前方後円	49	4	2.5	2.5	両	○	—	—	—
花山33号墳	前方後円	32	2.8	2.1	—	両	○	—	—	—
大谷山22号墳	前方後円	68	4.1	2.5	3.2	両	○	2	1	—
大日山35号墳	前方後円	86	4.3	2.4	2.9	両	○	2	1	—
大日山70号墳	円	14	1.9	1.3	—	左	○	—	—	—
明楽2号墳	円	16	1.3	1.8	—	両	○	—	—	—
晒山10号墳	前方後円	35	3.3	2.2	—	両	○	—	—	—
鏡島1号墳	円	12	2.1	1.4	2.4	両	○	2	2	—
天王塚古墳	前方後円	88	4.2	2.9	5.9	両	○	2	8	—
將軍塚古墳（前方部）	前方後円	42	2.4	1.9	—	両	○	1	—	—
（後円部）			3.3	2.3	4.3	両	○	1	1	○
前山67号墳	円	27	3.8	2.3	3.2	両	○	1	2	○
前山13号墳	円	18	2.7	2.1	2.9	両	○	1	2	○
大谷山4号墳	円	18	1.9	1.6	—	両	○	—	—	—
大谷山5号墳	円	15-19	2.1	1.8	—	両	○	—	—	○
伊太祈曽神社1号墳	円	16	2.8	2.2	3.4	両	○	2	2	—
鳴滝1号墳	円	—	3.5	2.5	2.9	両	○	1	—	○
船戸山2号墳	円	14	3	1.8	2.9	両	○	1	—	—
船戸山3号墳2号石室	円	20	3	2.2	2.4	両	○	1	—	—
船戸山6号墳	円	13-16	2.3	1.8	—	両	○	—	—	—
八幡塚古墳	円	20	3.5	2.5	2.5	両	○	1	—	○
高尾山1号墳	円	13-14	2.5	2	2.1	両	○	1	—	○
北1号墳	円	20	2.6	2	2.4	両	○	1	—	○
室山1号墳	橢円	20×17	3.2	2.2	3.1	両	○	1	4	○
室山2号墳	円	15	2.8	1.9	2.6	両	○	1	1	—
山崎山1号墳	円	20	3	2.2	—	両	○	1	—	○
井辺1号墳	方	40×28	4.2	2.7	—	両	○	1	1	○
寺内35号墳	円	12	2.6	2	—	両	○	—	—	—

表1 主な岩橋型石室

横穴式石室の影響を受けることがなかったのだろう。

〔謝辞〕

本稿は、令和5年11月19日に和歌山県立紀伊風土記の丘で開催された秋季特別展「律令国家成立前夜」の関連講座で発表した内容を基に再構成したものである。特別展の企画・展示を担当し、講座出講へのお声がけをいただいた上村緑氏にはお礼を申し上げておきたい。

また、本稿をまとめるにあたり助言をいただいた同僚の瀬口眞司氏、辻川哲朗氏への感謝をこの場をお借りしてお伝えしたい。

註

- (1) 本稿における横穴式石室の「系」とは、機能的属性を背景に意匠的・技術的属性を共有し、影響関係を持つ石室を指す用語として使用する。
- (2) 構築技術的要素とするか、埋葬行為に関する要素とするかは石棚・石梁をどのように評価するかによって異ってくる。藏富士氏は石棚・石梁を石室構造上の必要な工法の一つとしてとらえているが、筆者は、石棚は、少なくとも初期の段階では「開かれた棺」に関連する属性と理解していることから埋葬行為に関連する要素とした。
- (3) 大型古墳の基準は、墳形に前方後円墳を採用すること、もしくは20mを超える規模の円墳・方墳であること、玄室の規模が長さ3mを超えることとした。
- (4) 本稿における横穴式石室の施設等を説明する場合の左右は、奥壁から玄門部方向をみた左右で表記する。
- (5) ここで使用する紀北地域とは旧郡の海草郡、那賀郡、伊都郡、紀中地域とは有田郡、日高郡を指す（和歌山県立紀伊風土記の丘2019）。そのうち紀北地域西部は海草郡、那賀郡、紀中地域北部は有田郡を指す用語として使用する。

文献一覧（著者名・機関名50音順、刊行年順）

- 有田市教育委員会（1979）『一本松古墳・宮原古墳－有田川北岸の古墳発掘調査報告Ⅰ』有田市文化財報告第2集
- 岩出町（1976）『岩出町誌』岩出町誌編集委員会編
- 打田町（1981）『打田町史』第1巻史料編Ⅰ打田町史編集委員会編
- 太田宏明（2009）「九州系石室の伝播・拡散の過程－畿内型石室との比較検討を通じて－」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』日本考古学協会2007熊本大会分科会Ⅰ記録集北九州中国書店
- 太田宏明（2016）『横穴式石室と古墳時代社会－遺構分析の方法と実践』雄山閣
- 太田宏明（2018）「横穴式石室地域類型としての岩橋型石室」『紀伊考古学研究』第21号紀伊考古学研究会
- 太田宏明（2019）「横穴式石室構築技術の伝播からみた古墳時代社会」『シンポジウム開かれた棺－紀伊の横穴式石室と黄泉の世界－予稿集』和歌山県立紀伊風土記の丘
- 太田宏明（2019）「畿内地域からみた紀伊地域の横穴式石室」『古代学研究』第219号古代学研究会

- 大野左千夫・大野嶺夫（1978）「背見山古墳発掘調査概要」『古代学研究』第85号古代学研究会
- 海南市（1979）『海南市史』第3巻資料編1
- 河上邦彦（1977）「石棚を有する古墳について」『平群・三里古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第33冊
- 貴志川町（1981）『貴志川町史』資料編2貴志川町史編集委員会編
- 京都大学文学部考古学研究室編（1967）『和歌山県文化財学術調査報告書』第2冊和歌山県教育委員会
- 黒石哲夫（2005）「紀伊における後期古墳時代の集団関係－岩橋系横穴式石室の展開を中心として－」『待兼山考古論集－都出比呂志先生退任記念－』大阪大学考古学研究室
- 黒石哲夫（2007）「地域別概説紀伊の横穴式石室」『研究集会近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会
- 藏富士寛（2002）「石棚考－九州における横穴式石室内棚状施設の成立と展開－」『日本考古学』第14号日本考古学協会
- 藏富士寛（2009）「九州地域の横穴式石室」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』日本考古学協会2007熊本大会分科会Ⅰ記録集北九州中国書店
- 藏富士寛（2010）「石屋形・石棚－石屋形・石棚の出現・展開とその歴史的意義（予察）－」『先史学・考古学論究Ⅴ』下巻龍田考古会
- 藏富士寛（2019）「和歌山県岩橋千塚古墳群の横穴式石室と九州」『古代学研究』第219号古代学研究会
- 藏富士寛（2022）「墓室と棺」『横穴式石室からみた古墳時代社会』季刊考古学第160号雄山閣
- 末永雅雄編（1967）『岩橋千塚』関西大学文学部考古学研究室紀要第2冊
- 高木恭二（2022）「九州地方における横穴式石室の出現」『横穴式石室からみた古墳時代社会』季刊考古学第160号雄山閣
- 田辺昭三（1966）『陶器古窯跡群Ⅰ平安学園考古学クラブ』
- 田辺昭三（1981）『須恵器大成』角川書店
- 田村隆太郎（2022）「横穴式石室における棺体配置の多様性」『横穴式石室からみた古墳時代社会』季刊考古学第160号雄山閣
- 中村貞史（2010）「紀伊の石棚・石梁」『坪井清足先生卒寿記念論文集』下巻坪井清足先生の卒寿をお祝いする会
- 中司照世（2003）「岩橋型石室について－後期後半の首長墳の編年を中心に－」『紀伊考古学研究』第6号紀伊考古学研究会
- 萩野谷正宏（2019a）「岩橋千塚古墳群における岩橋型石室の展開過程」『古代学研究』第219号古代学研究会
- 萩野谷正宏（2019b）「岩橋型石室からみた群集墳と首長墓」『シンポジウム開かれた棺－紀伊の横穴式石室と黄泉の世界－予稿集』和歌山県立紀伊風土記の丘
- 萩野谷正宏（2021）「近畿の群集墳2紀伊」『群集墳研究の新視角－群集墳からみた古墳時代の社会と集団』古代学研究会編六一書房
- 萩野谷正宏（2022）「横穴式石室と群集墳近畿」『横穴式石室からみた古墳時代社会』季刊考古学160雄山閣
- 土生田純之（1994）「畿内型石室の成立と伝播」『古代王権と交流5』

名著出版

- 松下彰（1997）「梁棚考」『立命館大学考古学論集』Ⅰ 立命館大学考古学論集刊行会
- 松田正明（1979）『和歌山県における古墳時代後期』『和歌山の研究 1』地質・考古編清文堂
- 森浩一（1967）末永雅雄編『岩橋千塚』関西大学文学部考古学研究室紀要第2冊
- 森下浩行（1996）「日本における横穴式石室の出現とその系譜」『古代学研究』第111号古代学研究会
- 山崎信二（2003）「横穴式石室構造の地域別比較研究－中・四国編－」『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社
- 吉田宣夫（1979）「船戸山古墳群における多葬について」『和歌山の研究 1』地質・考古編清文堂
- 吉村靖徳（1992）「九州における横穴式石室の石棚について」『九州歴史資料館研究論集』17
- 吉村靖徳（2001）「石棚の系譜と伝播背景に関する試考」『古文化論叢』第47集九州古文化研究会
- 和歌山県教育委員会（1968）『和歌山県文化財学術調査報告書』第三冊
- 和歌山県教育委員会（1978）『山崎山古墳群緊急発掘調査報告書』和歌山県埋蔵文化財調査報告Ⅰ
- 和歌山県教育委員会（2000）『岩橋千塚周辺古墳群緊急確認調査報告書』
- 和歌山県教育委員会（2015）『特別史跡岩橋千塚古墳群発掘調査・保存整備事業報告書 3－大日山 35 号墳・前山 A 13 号墳・前山

A 58 号墳発掘調査報告書－』

- 和歌山県教育委員会（2017）『岩橋千塚古墳群－大谷山 4・5・6・39 号墳発掘調査報告書』
- 和歌山県教育委員会（2018）『岩橋千塚古墳群－大谷山 27 号・28 号発掘調査報告書』
- 和歌山県教育委員会（2020）『特別史跡岩橋千塚古墳群－天王塚 2 次・3 次発掘調査報告書－』
- 和歌山大学学生自治会考古学研究会（1958）『紀伊高尾山古墳』
- 和歌山大学考古学研究会（1974）「伊太祈曾古墳測量調査報告」『埴輪』10
- 和歌山県立紀伊風土記の丘（1996）『石棚と石梁－岩橋千塚の横穴式石室をさぐる－』
- 和歌山県立紀伊風土記の丘（2020）『開かれた棺－紀伊の横穴式石室と黄泉の世界』
- 和田晴吾（2003）「棺と古墳祭祀（2）－「閉ざされた棺」と「開かれた棺」」『立命館大学考古学論集』Ⅲ-2 立命館大学考古学論集刊行会
- 和田晴吾（2014）『古墳時代の葬制と他界観』吉川弘文館

挿図典拠

図 1・5 筆者作成

図 2 和歌山県立紀伊風土記の丘 2019 に加筆

図 3・4 筆者作成、石室実測図については各報告書より転載

（ほり まさと：総務課 副主幹）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.37 2024.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages